

薄れる意識の底で真田は、船に乗らねば、と心せいでいた。

翌朝、田中の溺死体が新町川べりで発見された。しかし、人々は阿波踊りの喧騒に酔っていた。抜けるような青空が広がっている。死体の側にうずくまり、記事をとる中山記

者の姿があった。不穏な世の中のなりゆきを見定めることを、死者から託された中山は思っていた。

その名のごとく優しい稜線を描く眉山が、中山の思いを穏やかに包んでいる。

〔了〕

## 短歌の中の真実と虚構

松田 一美

齋藤茂吉の第一歌集「赤光」（一九一三年刊）の「死にたまふ母」は五十九首の連作になっている。「ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひにつつしづ心なけれ」から始まる一連は、茂吉自解の「作歌四十年」によると、母重病の報に接し帰郷、母が歿し、火葬、悲しみを抱いて温泉に浴するまで、を時系列で詠んだとある。

その連作は起承転結の四部に分かれており、中でも「承」、つまり、「其の二」の一連はまことに圧巻である。「死にちかき母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる」我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ」のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」などは、今読んでも当時の茂吉の心情を深く伝えて余りある。

だが、と思う。本当に全てが現実の出来事であったのか、そこにひとつの虚構もなかったのか、と。そう思わせるにはそれなりの理由がある。同歌集所収の「悲報来」

の中に詠まれた二首は、まさしく茂吉の虚構詠の代表作だと断言してもいい。師、伊藤左千夫逝去の報に接してのちに詠んだ、「すべなきか螢をころす手のひらに光つぶれてせんすべはなし」と、「ほのほのとのおれ光りてながれたる螢を殺すわが道くらし」の歌がそれである。師であつた左千夫が亡くなつたという悲報を受けた、その直後に、螢といえど生き物を殺す行為など果たしてできたであらうか。茂吉曰く、道行的に詠んだため自然に螢が出てきたという。この言葉を引き出すまでもなく、茂吉の当時の心境とすれば、螢を殺すことはできなかつたはずだ。虚構と思いたいゆゑである。

短歌の世界は真実と虚構が混在している。それを物語化して読者に迫ってきたのが寺山修司であつた。

「生命線ひそかに変へむために

わが抽斗ひきだしにある一本の釘

〈子供の頃、君の生命線は短いと言われ、釘で傷つけて掌を血塗れにした。そんな時、僕の住んでいる隣の村に手相直しのおじいさんがいると聞くのを聞いた。貧弱な手相の持ち主に神託を書いた紙片を握らせたまま、三日三晩手を開かさないうようにして、手を開けたときには手相が変わつていくのである。しかし、謝礼が高額だと聞いた。貧しい母子家庭では大金を使うことなど

無理な話であつた。それでも僕は、どうしてもおじいさんに逢いたい。そのためには少々の犠牲も止むを得ないと決心する〉

「売りにゆく柱時計がふいに鳴る

横抱きにして枯野ゆくとき」

〈質屋でお金を借りようと、風呂敷に包んだ柱時計を横抱きにして母に内緒で家を抜け出す。十一歳の手相を修正するため。でも、質屋で柱時計の入質を受け付けてはくれなかつた。喘息病みのゼンマイ型の古い柱時計では、お金は貸せないという。僕は諦めた〉

「枯野ゆくとき」とあるから、枯野を歩いて、一山越えて行つたと推測される。柱時計を質屋に入れるという発想は、子供の考えとして妥当か。妥当としよう。しかし、質屋のおじいさんはお金を貸してくれなかつた。「喘息病みのゼンマイ」の古い柱時計は物にならないのだった。柱時計は君ん家の心臓なんだから、持ち帰つて元通りにしてあげなさい、と諭された可能性もある。結局、手相直しのおじいさんには逢えなかつたのである。

実際、修司が短命であつたことを照らし合わせてみれば、全てが虚構だつたとは言ひ切れない。短歌における真実と虚構は全て読者に委ねられている。だから何回読んでも、面白い歌は面白い。